

看護系大学生のHIV/AIDSに関する知識，性に関する認識  
および性行動とその関連

A report on the knowledge about HIV/AIDS, sexual perceptions and sexual behavior of  
nursing college students, and their relationship

橋本 秀実

三重県立看護大学紀要  
第15巻, 75~85, 2011

〔報告〕

## 看護系大学生のHIV/AIDSに関する知識, 性に関する認識 および性行動とその関連

A report on the knowledge about HIV/AIDS, sexual perceptions and sexual behavior of nursing college students, and their relationship

橋本 秀実

### 【要約】

〈目的〉大学生のHIV/性感染症（STI）についての知識・性に関する認識および性行動の実態とその関連を明らかにする。

〈方法〉大学生370名を対象に、HIV/STIの知識、性のモラル、HIV感染リスク認識、性交経験と相手人数、コンドームの使用、性情報の入手先等についての自記式質問紙調査を実施した。

〈結果〉4年生の性交経験は7割を超えた。HIV感染リスクが低い理由は特定相手との性交や危険な性交をしていない等が挙げられた。コンドーム使用目的は100%が避妊と答え、HIVやSTI予防は半数以下だった。エイズ関連知識と性交相手人数、コンドーム使用に関連はなく、性交相手人数が多い、不特定の相手との性交のほうがコンドームを使用していなかった。

〈考察〉決まった相手との性交なら安全という認識を覆すこと、コンドームの使用をSTI予防と位置付けること等、実態に応じた大学生のヘルスプロモーションが必要である。

【キーワード】大学生、性行動、性教育、リプロダクティブヘルス、エイズ

### I. はじめに

若者の性行動の活発化、若年者の人工妊娠中絶、HIV感染症を含む性感染症の問題などについての報告は多い。2009年、22万3444件の人工妊娠中絶のうち2万1999件が20歳未満によるもの、5万625件が20歳から25歳によるものであり、年齢区分別実施率では25～29歳、20～24歳の順となっている<sup>1)</sup>。2006年、10歳から29歳の性器クラミジア感染症の指定届出機関からの報告は20199件、淋菌感染症は6384件であった<sup>2)</sup>。また、HIV感染症は、15歳から29歳が約30%を占め、増加傾向にあると報告されている<sup>3)</sup>。このように性については青少年をめぐる健康問題の大きな課題の一つである。

日本の若者の性行動については、初交年齢の早期化や多数の性交相手を持つ傾向などについて報告されており、性交経験率に都会と地方では差がないとされている<sup>4)5)</sup>。性に関する実態は時代と文化に大きく影響

されると考えられるが、効果的なヘルスプロモーションを推進するためには実態を把握することが重要となる。とくに増加傾向にある若年者のHIV感染を減少させるためには、彼らのHIVを含めた性感染症（STI）に関する知識やHIV感染リスクの認識、性に関するモラルを含めた性についての認識、性行動を把握する必要がある。そこで近年の大学生のHIV・STIについての知識・性に関する認識および性行動の実態とその関連を明らかにすることを目的に調査を実施したので報告する。

### II. 研究方法

#### 1. 調査対象および調査期間

2009年11月から2010年1月にかけて、A大学看護系学生（1～4年）370名を対象に自記式質問紙法による調査を行った。

## 2. 調査内容

属性（学年・性別・親との同居等）のほか、次のような質問からなる調査票を作成した。

### (1) HIV・STI関連の知識

HIV・STI関連の知識では、HIV・STIに関する文章の正誤を17項目について尋ねた。

### (2) 性に関する認識

性に関する認識では、性のモラル、HIV感染リスクの認識とその理由、HIV感染不安と検査の有無について尋ねた。

性のモラルは性行動に関する容認についての8項目を尋ねた。HIV感染リスクの認識では、自分自身の感染の可能性について「まったくくないと思う」から「非常に高いと思う」に「わからない」を加えた選択肢で尋ねた。さらに、感染リスクが「低いと思う」群と「高いと思う」群それぞれに、そう思う理由について複数回答で尋ねた。HIV感染不安と検査では、過去1年間にHIV感染について不安になったことがあるかどうか、過去1年間にHIV検査を受けたかどうか、さらに受けたものについては検査場所、不安があるのに受けたことがないものにはその理由を尋ねた。

### (3) 性行動について

性行動については、性交経験と相手の人数、コンドームの使用、その目的、未使用の理由、性に関する情報の入手先と性教育の受講経験について尋ねた。

性交経験については、あるかどうかを尋ね、ある場合は過去一年に決まった相手とセックスをしたか、不特定の相手とセックスをしたか、今までに金銭を介するセックスをしたかどうか、今までのセックスの相手人数、同時期の複数の相手との性関係の経験について尋ねた。コンドームの使用については一番最近の性交時の使用を尋ね、使用したものにはその目的、その時の相手について、使用の決定者と使用についての考えを尋ねた。使用しなかったものにはその理由を尋ねた。性に関する情報源は複数選択で聞いた。性教育の受講経験については性教育、避妊、エイズのそれぞれについていつ受けたかを複数選択で聞いた。

質問項目は、いずれも木原らの「全国国立大学生 Sexual Health Study」調査報告書<sup>6)</sup>を参考にして作成した。

## 3. データ収集および分析方法

調査は、大学の講義終了後に研究依頼のため講義室に残ってもらおうよう学生に依頼し、研究者が調査票を配布した。教室に残った学生に研究の趣旨と倫理事項（自由参加であること、参加しないことで不利益は生じないこと、無記名であること、回答用紙の厳重な保管等）について説明した。質問紙の回収は鍵のかかるボックスとし、回収機関は2週間、シールつき封筒にて回収し、質問紙の回収をもって調査に同意したものとした。本研究は、三重県立看護大学研究倫理審査会の審査を受けて実施した（受付番号091702）。

データの分析は、SPSS（Ver.16JP）を用い、単純集計の後、学年別・男女別の違いや項目間の関連をみるためPearsonの $\chi^2$ あるいはFisherの正確確率検定を行った。質問項目ごとに未記入のものを除外して分析した。

表1 回答者の概要 (n=273)

年齢 (22年3月時点)	平均年齢±SD	21.4±6.9	
		n	%
学年	1年	77	28.2
	2年	36	13.2
	3年	83	30.4
	4年	77	28.2
	全	273	100
性別	女	251	91.9
	男	22	8.1
親と同居・別居	別居	128	46.9
	同居	145	53.1

## Ⅲ. 結果

### 1. 回答者の概要

質問紙は370名に配布し、273名から回答を得た（回収率73.8%）。回答者の概要を表1に示す。

### 2. HIV/STI関連の知識

HIV/STIに関する知識の結果を表2に示す。17箇中平均正解数は14.80±1.33であった。項目別では14項目で80%以上の正解率であったが質問項目⑥「蚊や虫に刺されてHIVに感染する」に正解したのは124名（45.4%）、⑩「性感染症にかかっているとHIVに感染しやすい」に正解したのは157名（57.5%）、⑨「口から

表2 HIV/STI関連の知識(正解者)

	1年(%)	2年(%)	3年(%)	4年(%)	女性(%)	男性(%)	全(%)
① HIV感染者は増加している	72 (93.5)	26 (100.0)	79 (95.2)	74 (97.4)	240 (95.6)	21 (95.5)	261 (96.0)
② HIV感染経路は性行為が多い	75 (97.4)	36 (100.0)	81 (97.6)	76 (98.7)	248 (98.8)	20 (90.9)	268 (98.2)
③ エイズは完全に治すことができる	60 (77.9)	31 (86.1)	79 (95.2)	76 (98.7)***	225 (89.6)	21 (95.5)	246 (90.1)
④ 食器の共用でHIVに感染する	69 (89.6)	36 (100.0)	78 (94.0)	77 (100.0)	240 (95.6)	20 (90.9)	260 (95.2)
⑤ プールや風呂でHIVに感染する	67 (87.0)	36 (100.0)	83 (100.0)	75 (97.4)	241 (96.0)	20 (90.9)	261 (95.6)
⑥ 蚊や虫に刺されてHIVに感染する	28 (36.4)	14 (38.9)	40 (32.3)	42 (54.5)	114 (45.4)	10 (45.5)	124 (45.4)
⑦ トイレの共用でHIVに感染する	73 (94.8)	36 (100.0)	82 (98.8)	77 (100.0)	247 (98.4)	21 (95.5)	268 (98.2)
⑧ 感染した妊婦から赤ちゃんにHIVが感染する	75 (97.4)	36 (100.0)	82 (98.8)	75 (97.4)	247 (98.4)	21 (95.5)	268 (98.2)
⑨ 口から性器に性感染症が感染する	53 (68.8)	24 (66.7)	50 (60.2)	47 (61.0)	160 (63.7)	14 (63.6)	174 (63.7)
⑩ 性器から口に性感染症が感染する	66 (85.7)	33 (91.7)	71 (85.5)	65 (84.4)	216 (86.1)	19 (86.4)	235 (86.1)
⑪ 性感染症にかかっているとHIVに感染しやすい	47 (61.0)	21 (58.3)	51 (61.4)	38 (49.4)	145 (57.8)	12 (54.5)	157 (57.5)
⑫ 健康に見えてもHIVに感染していることがある	77 (100)	37 (100.0)	82 (98.8)	77 (100.0)	250 (99.6)	22 (100.0)	272 (99.6)
⑬ 性感染症に感染すると必ず症状が出る	66 (86.8)	34 (94.4)	76 (91.6)	72 (93.5)	232 (92.8)	16 (72.7)**	248 (91.2)
⑭ コンドームの使用はHIV感染予防になる	74 (96.1)	34 (94.4)	83 (100.0)	77 (100.0)	247 (98.4)	21 (95.5)	268 (98.2)
⑮ コンドームの使用はSTI感染予防になる	63 (81.8)	30 (83.3)	75 (90.4)	73 (94.8)	221 (88.0)	20 (90.9)	241 (88.3)
⑯ HIV検査では感染後2~3日で感染が分かる	55 (71.4)	30 (83.3)	70 (84.3)	64 (83.1)	204 (81.3)	15 (68.2)	219 (80.2)
⑰ 保健所では無料匿名でエイズ検査ができる	76 (98.7)	36 (100.0)	82 (98.8)	76 (98.7)	248 (98.8)	22 (100.0)	270 (98.9)

\*\*p<.01

\*\*\*p<.001

性器に性感染症が感染する」の正解は174名（63.7%）であった。学年別では③「エイズは完全に治すことができる」では学年が上がるとう正解が増え（ $p < 0.001$ ）、男女別にみると⑬「性感染症に感染すると必ず症状が出る」で、女子の方が有意に正解者が多かった（ $p = 0.007$ ）。

### 3. 性に関する認識

#### (1) 性のモラル

大学生の性のモラルの結果を表3に示す。高校生のセックスについては男女とも8割を超える学生が容認していた。全体に学年別の差はなかったが、男女別で比較したところ、不倫・不貞および金銭の授受を伴うセックスについて、男性のほうが女性よりも高い容認度を示した。

#### (2) HIV感染リスクの認識とその理由

HIV感染リスクの認識は「まったくないと思う」が47（17.3%）、「非常に低い」が51（18.8%）、「低い」が76（27.9%）、「中くらい」が58（21.2%）、「高い」が17（6.2%）、「非常に高い」が2（0.7%）、「わからない」が21（7.7%）であった。「中くらい」から「非常に高い」と答えたものにその理由を聞いたところ（ $n = 77$ 、複数回答）、「HIVの増加」を66名が、「セックスの経験」を29名が、「現在セックスの相手あり」を20名が、「コンドーム不使用」を13名が挙げていた。「まったくない」から「非常に低い」と答えた理由では（ $n = 173$ 、複数回答）、「決まった人とだけセックスする」が92名、「いつもコンドームを使用」が70名、「危険なセックスをしていない」が60名、「セックスの経験な

し」が57名、「セックスの相手を信用」が53名、「感染の可能性のある人とはセックスしていない」が48名、「現在セックスの相手がいない」が33名であった。

#### (3) HIV感染不安と検査の有無

HIV感染の不安を経験したことがあるものは11名（4.0%）で、そのうち過去1年間にHIV抗体検査を受けたことがあると答えたのは2名、いずれも保健所で受けていた。感染不安があるにもかかわらず検査を受けなかった理由を尋ねたところ（複数回答）、「結果を知るのが怖かった」が4名、「プライバシーが守れるか心配」2名、「その他」4名であった。

### 4. 性行動について

#### (1) 性交経験の有無とパートナー数

性交経験とその相手について表4に示す。性交経験については全体で159名（59.3%）の学生がありと答えていた。学年別に見ると1年は33名（44.6%）、2年23名（63.9%）、3年48名（58.5%）、4年生55名（72.4%）であった（ $p = 0.006$ ）。男女別では、女性144名（58.5%）、男性15名（68.2%）であった。性交経験のある学生のうち親と同居の学生は73名（51.8%）であったのに対し、別居では86名（67.7%）であった（ $p = 0.008$ ）。

過去1年の性交の相手は「決まった相手」が138名（94.5%）、「不特定の相手」は20名（13.7%）であった（ $n = 146$ 、複数回答）。これまでの性交相手の人数については、1人88名（55.7%）、2人29名（18.4%）、3人11名（7.0%）、4人以上が30名（19.0%）であった（ $n = 158$ ）。親と同居の学生はこれまでの性交相手人数

表3 性のモラル

	女性		男性		全		男女の比較 $\chi^2$ 値
	n	(%)	n	(%)	n	(%)	
男子高校生のセックス	213	(85.5)	20	(90.9)	233	(86.0)	0.483
女子高校生のセックス	212	(85.1)	20	(90.9)	232	(85.6)	0.546
既婚男性の不倫	14	(5.6)	5	(22.7)	19	(7.0)	9.129*
既婚女性の不倫	13	(5.2)	5	(22.7)	18	(6.6)	10.113**
恋人のいる男性の不貞	28	(11.2)	8	(36.4)	36	(13.2)	11.150**
恋人のいる女性の不貞	29	(11.6)	7	(31.8)	36	(13.2)	7.256*
お金を払ったセックス	66	(26.6)	14	(63.6)	80	(29.6)	13.285**
お金をもらったセックス	56	(22.6)	15	(68.2)	71	(26.3)	21.681**

\* $p < .05$

\*\* $p < .01$

表4 性交経験とその相手

	1年 (%)	2年 (%)	3年 (%)	4年 (%)	p値	親と別居 (%)	親と同居 (%)	p値	全 (%)
性交経の有無 n=268									
あり	33 (44.6)	23 (63.9)	48 (58.5)	55 (72.4)	0.006**	86 (67.7)	73 (51.8)	0.008**	159 (59.3)
過去1年のセックスパートナー (複数回答) n=146									
決まった相手	27 (96.4)	23 (100.0)	39 (92.9)	49 (92.5)		75 (94.9)	63 (94.0)		138 (94.5)
不特定の相手	5 (17.9)	0 (0)	6 (14.3)	9 (17.0)		14 (17.7)	6 (9.0)		20 (13.7)
これまでのセックスパートナー数 n=158								0.03*	
1人	17 (53.1)	6 (18.8)	2 (6.2)	7 (21.9)		50 (58.1)	38 (52.8)		88 (55.7)
2人	6 (18.8)	4 (17.4)	6 (12.5)	13 (23.6)		9 (10.5)	20 (27.8)		29 (18.4)
3人	2 (6.2)	1 (4.3)	2 (4.2)	6 (10.9)		7 (8.1)	4 (5.6)		11 (7.0)
4人以上	7 (21.9)	1 (4.3)	9 (18.8)	13 (23.6)		20 (23.3)	10 (13.9)		30 (19.0)
同時に複数の性的関係 n=158									
あり	4 (12.5)	3 (13.0)	5 (10.4)	10 (18.2)	0.70	16 (18.6)	6 (8.3)	0.06	22 (13.9)

\*p<.05 \*\*p<.01

が4人以上が10名(13.9%)であり、別居は20名(23.3%)であった。性交相手人数と親と同居・別居については有意な差が見られた( $p=0.03$ )。

同時に複数の相手と性的関係を持ったことがあるのは22名(13.9%)であった。

### (2) コンドームの使用について

直近の性交におけるコンドームの使用は137名(86.7%)で、使用目的は、避妊137名(100.0%)、性感染症予防65名(47.4%)、HIV予防51名(37.2%)であった( $n=137$ 、複数回答)。

コンドームを使用しなかった理由については「相手が嫌がった」8名(42.1%)、「持っていなかった」6名(28.6%)、「その他」5名(23.8%)、「妊娠の危険のない時」4名(19.0%)、「妊娠しても構わない」3名(14.3%)であった( $n=21$ 、複数回答)。

コンドーム使用の決定者は「自分」29名(20.0%)、「相手」27名(18.6%)、「二人」87名(60.0%)であった。男性で「自分」と答えたのは11名(73.3%)、女性は18名(13.8%)、男性で「相手」と答えたのは0名、女性は27名(20.8%)であった。

### (3) 性に関する情報の入手先と性教育受講経験

性に関する情報の主な入手先について上位10位までの結果を表5に示した。情報の主な入手先は、友人が192名(73.0%)、雑誌・週刊誌が143名(54.4%)、中学校・高校の教師・養護教諭が102名(38.8%)と続いた。教師・養護教諭と答えたのは女子学生に多く( $p=0.038$ )、ビデオ(DVD)と答えたのは男子学生に多かった( $p<0.001$ )。

性感染症、避妊、エイズの教育はいずれも8割を超える学生が受けたことがあると答え、受けたことがない、わからないと答えたのは1割に満たなかった。

### 5. エイズに関する知識とエイズ教育受講回数、性行動との関連

エイズに関する知識の正解数の中央値、最頻値である15未満とそれ以上のグループに分け、エイズ教育機会数との関連を見たが、関連はなかった。また、正解数とセックスの相手の人数、正解数とコンドーム使用との間に関連は見られなかった。

### 6. リスク認知とセックス相手人数、コンドーム使用との関連

HIV感染リスクの認知が高い群、低い群とセックス相手人数(2人未満と3人以上)の関連を見たところ相手人数が多いほうがリスク認知が高く( $p=0.035$ )、過去一年に不特定の相手とセックスをしたことがあるものはリスク認知が高かった( $p=0.015$ )。直近のコンドーム使用の有無とリスク認知の関連はなかった。

### 7. コンドームの使用とセックスパートナーとの関連について

コンドームの使用とセックスパートナーとの関連を表6に示した。直近のコンドーム使用とセックスの相手との関連では不特定の相手の方がコンドームを使用していなかった( $p=0.003$ )。また、コンドームの使用とセックスの相手人数を見たところ、セックスの相手が多いほうが有意にコンドームを使用していなかった

表5 性に関する情報入手先(複数回答、上位10項目)  $n=263$

	女性	男性	p値	全
友人	173 (71.8)	19 (86.4)	0.140	192 (73.0)
雑誌・週刊誌	130 (53.9)	13 (59.1)	0.643	143 (54.4)
中学校高校の教師・養護教諭	98 (40.7)	4 (18.2)	0.038*	102 (38.8)
テレビ	84 (34.9)	9 (40.9)	0.570	93 (35.4)
セックスの相手	87 (36.1)	4 (18.2)	0.091	91 (34.6)
マンガ・コミック	74 (30.7)	9 (40.9)	0.324	83 (31.6)
専門書	38 (15.8)	2 (9.1)	0.545	40 (15.2)
ビデオ(DVD)	18 (7.5)	16 (72.7)	<0.001**	34 (12.9)
医師・看護師・保健師	26 (10.8)	3 (13.6)	0.720	29 (11.0)
母	21 (8.7)	1 (4.5)	1.000	22 (8.4)

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

( $p=0.015$ )。

#### IV. 考察

##### 1. HIV・STI関連の知識

17項目中14項目で80%以上の正解率を示し、⑥「蚊や虫に刺されてHIVに感染する」という項目以外、1999年全国調査より正解率は高い傾向を示した<sup>7)</sup>。1999年文部省は我が国の文教施策の中で学校教育におけるエイズ教育の充実を挙げ<sup>8)</sup>、中学校の学習指導要領にエイズおよび性感染症を取り扱うことと定めた<sup>9)</sup>。現在の大学生はエイズ教育を受けてきた世代であると考えられ、この正解率の高さがもたらされたものと推察される。しかしながら、「蚊や虫に刺されてHIVに感染すること」ことや「口から性器に性感染症が感染すること」、「性感染症にかかっているとHIVに感染しやすい」ことなど、正解率の低い項目もあり、必ずしも知識が十分であるとはいえない。特に、オーラルセックスを介しての性感染症や、HIV感染を防止するためには、これらの項目についての知識が重要となると思われる。今後の性教育において意識的に取り上げるべき項目であるといえる。

③「エイズは完全に治すことができる」で学年により差が見られたことは、大学における講義の成果ではないかと考えられる。また、⑬「性感染症に感染すると必ず症状が出る」項目で女性に正解が多かったことは、クラミジア感染が若い女性に多いことから<sup>10)</sup>、女子学生が無症候感染を自分の問題として受け止めていることが要因ではないかと考えられる。

##### 2. 性に関する認識

###### (1) 性のモラル

木原らによる1999年の全国国立大学生Sexual Health Studyと比較すると<sup>11)</sup>、女子学生の答えた既婚男女の不倫以外の項目の容認率が本調査の方が高い傾向にあった。本調査の結果から要因は特定できないが、10年間の大学生の性意識の変化によるもの、あるいはA大学の特徴によるものと推察される。本調査では、高校生男女のセックスの容認について男女間で有意差がなかったが、1999年全国調査では8項目すべてにおいて男子学生の方が女子学生より高い容認度を示していた。A大学では女子学生85%、男子学生90%とほとんどの学生が容認していることから差がなく、現在の大学生は、高校生のセックスは問題ないと考えていることが明らかとなった。青少年のセクシャルヘルスプロモーションを進める上で、彼らのこの認識を十分に理解して進めていく必要があると考える。

###### (2) HIV感染リスクの認識とその理由

感染リスクについて、まったくないから低い群は64.0%、中くらいから高い群は28.2%であった。1999年全国調査よりリスク認識について高い傾向にある。実際にA大学の性交経験率が特段高いわけでも、危険な性行為をしているものが多いわけでもないことから、これは、実際にリスクが高いからというより、むしろ知識が高いからリスクをより認識しているのではないかと推察される。

感染リスクを低いとした群の理由では「決まった人

表6 コンドーム使用とセックスパートナーとの関連

	使用した (%)	使用しなかった (%)	p値	計
コンドームの使用	137 (86.7)	21 (13.3)		158
セックスの相手 n=155			0.003**	
決まった相手	131 (90.3)	14 (9.7)		145
不特定の相手	5 (50.0)	5 (50.0)		10
セックスパートナー数 n=158			0.015*	
2人未満	106 (90.6)	11 (9.4)		127
3人以上	31 (75.6)	10 (24.4)		41

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$



だけとセックスする」や「危険なセックスをしていない」など、感染リスクがない理由としては不十分なものが多く挙げられた。木原は、性的ネットワークの広がりから、現代の若者に対して「不特定多数の性交相は危険」というメッセージは不十分であると述べている<sup>12)</sup>。決まった相手でも感染するリスクは否定できないことに関する啓発が必要と考える。

### (3) HIV感染不安と検査の有無

HIV感染の不安があったのは11名であったが、抗体検査を受けたものはそのうち2名のみであった。「結果を知るのが怖かった」や「プライバシーの不安」などを理由に受けていないが、HIV感染の広がりを予防するには、感染リスクを冒さない1次予防だけでなく、HIV抗体検査を積極的に受ける2次予防も重要である。筆者は、南アフリカにおけるHIVカウンセリングと検査サービスの活動を通して、HIVカウンセリングと検査が受検者に自分自身の行動と人生を振り返り、将来を考える機会を提供することを実感した。HIV予防教育に加えて、HIV感染を不安に思う大学生が自分自身を振り返る機会ともなるHIV検査の推奨が必要と考える。

## 3. 性行動について

### (1) 性交経験の有無とパートナー数

性交経験は1年生ですでに半数近くがあり、4年生になると7割を超える。男女で有意差は見られなかったが、親と別居の学生に有意に経験率が高かった。親元を離れると、監督の目が行き届きにくくなるのが要因と考えられる。性交経験率については、1999年全国調査より1年生で多い傾向があるものの、4年生ではほぼ同じ割合であった。調査時期が全国調査では4～6月であったことによるものと考えられる。2005年の青少年の性行動全国調査では大学生の性交経験が61%と報告されており<sup>13)</sup>、A大学の性交経験率は全国的な傾向と大差ないと考えられる。

### (2) コンドームの使用について

直近の性交におけるコンドームの使用については、1999年全国調査が70-80%であるのに対し<sup>14)</sup>、本調査は高い傾向を示した。使用目的については全員が避妊と答えており、STIやHIVの予防と答えたのは半数にも

満たなかった。この結果は、コンドーム不使用の理由について妊娠の危険のない時や妊娠してもかまわないと答えていることとつながっている。ここから、学生はコンドームを避妊の道具ととらえていること、STIやHIV予防の意識は低く、コンドームをそのための道具ととらえているものは少ないということが推察される。もちろん、望まない妊娠を避けるために避妊をすることは重要であり、そのためにコンドームを使用することはSTI予防のためにも推奨されるべきことであるが、避妊具としてのコンドームだけが印象づけられると妊娠の危険のない時は使用しないという選択をすることになる。カップルでSTIの危険がないことを確認しない限りその予防をすることが必要であることから、STI予防としてのコンドーム使用の重要性を周知する必要があると考えられる。

### (3) 性に関する情報の入手先と性教育受講経験

全体で多かったのは友人、雑誌・週刊誌、教師・養護教諭、テレビ、セックスの相手の順であった。教師・養護教諭以外は信頼性が高い情報とは言えず、信頼性のある情報源から情報を得ている学生は多くないことがわかった。しかしながら、専門書や保健医療従事者と答えた学生がそれぞれ1割を超えたことは、教師と答えた学生が3割いることと合わせて、正しい情報を入手する方法を知っている学生もいるといえる。今後さらに学生が性に関して相談しやすい、気軽に相談できる保健室および教員との関係をつくり、適切な相談窓口を紹介していく必要があると考える。

性教育やエイズ教育の機会は小・中・高等学校を通して受講経験のあるものが多く、先に述べた文部科学省の施策等からの近年の性に関する教育の量的拡大を示しているといえる。

## 4. エイズに関する知識との関連

エイズ教育を受講した経験のある校種の数とエイズに関する知識との関連は見られなかった。先に述べたように性教育の量の拡大は見られたものの質に課題があるのではないかと推察される。また、セックス相手の人数やコンドームの使用とも関連は見られないことは、エイズ関連知識は必ずしもエイズ予防行動に結びついていないと言える。松浦は、青少年の感染症予防において知識と行動の関連性がないと報告している<sup>15)</sup>。

また、尼崎らも大学生の性感染症に関する知識はコンドームの使用行動にネガティブに影響していると報告していることと矛盾しない結果が示された<sup>10)</sup>。尼崎らは講義形式の知識注入型の教育は表面的な知識の習得に終わり、態度や行動に影響を与えるまでの深い理解が伴わない可能性を指摘した。五十嵐はエイズに関する知識はHIV感染予防行動にネガティブに作用していることを明らかにし、行動変容のためには知識伝達型教育ではなく、学習者の主体的・自発的・積極的な参加による学習が必要であるとし、田中らも、大学生のコンドームの使用にはピアの役割が影響していることを明らかにしている<sup>17)18)</sup>。以上のことからピアカウンセリングや個別的働きかけの重要性が確認された。

本研究でコンドームの使用は「二人で決定する」というのが全体で60.0%を占めていた。女子では64.6%であったのに対し男子は20%で、男子は「自分」が一番多く73.3%であった。これは、コンドームが男性用避妊具であることから当然の結果であるともいえ、木原ら、斎藤らの調査とも一致する結果である<sup>19)20)</sup>。女子学生が自ら、望まない妊娠を避け、STIを予防するためには、二人で決定するコンドームの使用に際して、自らの希望を主張できるコミュニケーションスキルが必要であろう。一方、男子学生にたいしては、コンドームの必要性を認識し、男子学生のピアのコミュニケーションにおいてコンドームの使用が当然となるような働きかけが必要ではないか。さらにカップルの関係において、男子がより相手の意見を聞き入れる対等な関係を作ることが望ましいと考える。

## 5. リスク認知とセックス相手人数、コンドーム使用との関連

HIVの知識とコンドームの使用に関連はないが、不特定の相手とのセックスや、今までのセックスの相手の数が多い学生の方がコンドームを使用していなかった。つまり、性感染症のリスクが高い行為を重ねているのである。不特定の相手とのセックスにおいてコンドームを使用しない傾向は木原らの調査でも見られた<sup>21)</sup>。これは、セックス相手との関係性によるものではないか。先に述べたように相手とのコミュニケーションがコンドーム使用の決定につながっているのであれば、その場限りの相手とはお互いを大切にす性感染症や妊娠予防についてのコミュニケーションが不十分

であると推察される。このような性感染症のリスクの高い学生に対しての対策が必要であろう。

また、いわゆる安全でないセックス行為—不特定の相手とのセックス、セックスの相手多数—を重ねているもののほうがHIVのリスク認知が高かった。つまり、これらの学生は、リスクがあることを知りながら危険な行為を重ねているのである。喫煙、飲酒、性行動など青少年の危険行動は互いに関連しあい、その要因には心理社会的問題があると言われている<sup>22)~24)</sup>。危険な性行動をとる学生はセルフエスティームや社会的スキル、性に関する自己効力感に問題があるのではないかと考えられ、リスクの高い学生への心理社会的側面に着目した個別アプローチが必要になってくると考えられる。

また、五十嵐は、HIV感染予防行動は、それに対する肯定的態度や行動意図、規範意識が影響していることを明らかにしている<sup>25)</sup>。ピアからの影響を強く受けると考えられる彼らに対して、性感染症予防のためのコンドーム使用が当たり前であるという風潮をどう作り上げていくか、リスクの高い学生をどうスクリーニングし、どのようにアプローチしていけばよいかは大きな課題である。

## V. まとめ

1. 8割を超える大学生が高校生の性交を容認していた。金銭の授受を伴う性交については3割に近い大学生が、恋人のいる人の不貞は1割強が容認していたが、男子学生の方が容認率が高かった。
2. 大学4年生で7割を超える大学生が性交を経験しており、直近の性交におけるコンドームの使用は86%であった。コンドームの使用目的は全員が避妊と答え、性感染症予防やHIV予防と答えたのは半分に満たなかった。
3. HIV関連知識と性交相手人数、コンドーム使用との関連は見られなかった。性交相手数が多い者、不特定の相手との性交の方がコンドームを使用していなかった。
4. 大学時代に性交を経験する学生が多いことから、この時期のセクシャルヘルスプロモーションは重要である。近年の大学生の性に関するモラルや実態を的確に把握し、取り組みを進める必要がある。
5. 危険な性行為をしていないからHIVに感染してい

ないと思う学生が多かった。また、コンドームの使用目的は避妊が100%であったが、HIVやSTIの予防と答えたのは半数に満たなかった。HIV検査の推奨、性感染症予防としてのコンドームの使用、特定の相手でも、性経験が少なくても性感染症の危険はあることなどを伝える必要がある。

6. 性に関する知識は安全な性行動に結びついていなかった。若者の行動はピアに影響されやすいことから、ヘルスプロモーションを通じた性感染症予防やカップルの対等なコミュニケーション促進の文化の醸成が求められる。

本研究は、平成21年三重県立看護大学学長特別研究費の助成を受けた。本研究の一部は平成22年度第2回日中韓看護学会(東京)において発表した。研究に協力してくださった大学生の皆様から感謝いたします。

#### 【文献】

- 1) 厚生労働省：2009年衛生行政報告例の概要，2011.10.4，<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/09/dl/kekka5.pdf>
- 2) 文部科学省：平成20年青少年白書，2011.10.4，[http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h20honpenhtml/html/bl\\_shol\\_1.html](http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h20honpenhtml/html/bl_shol_1.html)
- 3) 厚生労働省：平成22(2010)年エイズ発生动向年報，2011.10.4，[http://api-net.jfap.or.jp/status/2010/10nenpo/hyo\\_06\\_02.pdf](http://api-net.jfap.or.jp/status/2010/10nenpo/hyo_06_02.pdf)
- 4) 木原雅子：10代の性行動と日本社会—そしてWYSH教育の視点—，P.2-34，ミネルヴァ書房，京都，2006.
- 5) 片瀬一男：青少年の生活環境と性行動の変容—生活構造の多チャンネル化のなかで—，財団法人日本性教育協会，「若者の性」白書—第6回青少年の性行動全国調査報告—，P.23-47，小学館，東京，2007.
- 6) 木原雅子，木原正博，天野恵子ほか：「全国国立大学生Sexual Health Study」調査報告書 大学生のHIV/STD関連知識・性意識に関する研究，教育アンケート年鑑2000年版下，P.105-112，創育社，東京，2000.
- 7) 前掲書6)，P.105-112
- 8) 文部科学省：平成11年度我が国の文教施策，2011.10.5，[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpad199901/hpad199901\\_2\\_171.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199901/hpad199901_2_171.html)
- 9) 文部科学省：中学校学習指導要領，2011.10.5，[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/990301c.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301c.htm)
- 10) 大國剛：性感染症検診の成果と課題，公衆衛生，66(5)，2002.
- 11) 前掲書6)，P.105-112
- 12) 前掲書4)，P.35-54.
- 13) 財団法人日本性教育協会：付表Ⅱ主要調査結果1，財団法人日本性教育協会，「若者の性」白書—第6回青少年の性行動全国調査報告—，P.196-219，小学館，東京，2007.
- 14) 前掲書6)，P.105-112
- 15) 松浦賢長：北九州都市圏における青少年を対象とした性感染症に対する認識・行動調査(1)，性と健康，12，2007.
- 16) 尼崎光洋，清水安夫：性感染症予防における知識と態度がコンドームの使用に及ぼす影響—コンドームの使用に対する態度尺度の開発とKABモデルの検証—，学校保健研究，50，2008.
- 17) 五十嵐哲也：高校生および大学生のHIV感染予防行動を規定する要因，学校保健研究，44，2002.
- 18) 田中祐子，岡本玲子：セーフター・セックス実践志向に焦点を当てたSexual-Risks Scale日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検証，学校保健研究，50，2008.
- 19) 前掲書6)，P.105-112
- 20) 齋藤和佳子，中野朋美，芝木美沙子ら：大学生の性意識と性行動の実態調査，北海道教育大学紀要(教育科学編)，56(2)，2006.
- 21) 前掲書6)，P.105-112
- 22) 井上松代，西平朋子，賀数いづみほか：高校生の性行動と関連する要因の研究，思春期学，22，2004.
- 23) 野津有司，渡邊正樹，渡部基ほか：日本の高校生における危険行動の実態及び危険行動間の関連—日本青少年危険行動調査2001年の結果—，学校保健研究，48：2006.
- 24) 川畑徹朗，石川哲也，勝野真吾ほか：中・高校生の性行動の実態とその関連要因—セルフエスティームを含む心理社会的変数に焦点を当てて—，学校

保健研究, 49 : 2007.

25) 前掲書17)